

侘び数寄の茶の源流についての一考察

著者	西田 周平
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論集
巻	8
ページ	35-50
発行年	2018-11-30
その他のタイトル	The Roots of Connoisseurship
URL	http://hdl.handle.net/10112/16407

侘び数寄の茶の源流についての一考察

西 田 周 平

The Roots of Connoisseurship

NISHIDA Shuhei

Abstract

The custom of drinking tea, which is thought to have become popular from the end of the Heian period, is still with us to this day, even although its form has undergone a number of changes along the way. Among the various customs of drinking tea that have continued over this period of time, two that should be considered in particular are *tocha* and *wabisuki no cha*, which became popular in the Muromachi Period. For many years, the roots of *wabisuki no cha* were thought to have originated in tea placed on the large utensil stand found in *shoinzukuri*-type architecture, but that theory has now been rejected. Instead, as has been discovered in subsequent research, the theory today is that the origins lie in the common tea peddlers (*ippuku issen*) that arose in the early Muromachi period. It should be considered the tea that arose from the living rooms that were the private spaces of the Muromachi era. Through an analysis of the *emaki* picture scrolls from the Muromachi period entitled *Muromachi-Dono Gyoko Okazariki*, this paper revisits the idea that tea in actuality arose from the private spaces for tea connoisseurship in the Muromachi period.

keywords : 書院茶 ; 「ハレ」と「ケ」 ; 会所 ; 「室町殿行幸御飾記」 ; 一服一銭

はじめに

遅くとも平安時代後期には受容していたと考えられている喫茶の風習は、時代に応じてその都度姿を変えながらも、今に伝わっている。日本に最初に入ってきた喫茶法は餅茶法（団茶法）であったが、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、現在も行われている点茶法がもたらされた。江戸時代に入ると、淹茶法（煎茶法）が日本にもたらされ、上流階級が担い手となった「侘び数寄の茶」を嫌った上方の文人を中心に広まった。長きにわたる喫茶の風習の中で特に注目すべきは、室町時代に流行した「闘茶」と「侘び数寄の茶」であろう。草庵という狭小な空間における「侘び数寄の茶」というものは、千利休が禅的精神をもとに、侘び数寄を探求したことによって深化したものであり、その結果が長次郎や天下一を称した田中宗慶らによって造られた楽茶碗、大山崎の妙喜庵侍庵の二畳茶室などに結実しているといえよう。江戸時代以降に作り出された数多くの逸話によって神格化された利休像にしたがって、長年多くの研究者が議論を交してきたが、秀吉との対立の中で切腹させられたはずの利休が、実は九州地方へ逐電していたのではないかという中村修也氏の説¹⁾が登場するなど、茶道史においてもはや常識といえる物事ですら、もう一度検討するべき状況になってしまったといえよう。もはやここに至っては、改めて茶道史全体をある特定の部分を細かく掘り下げて見ていくのではなく、茶道史における通説や茶道における常識といえるものをも含めて、本当に事実かどうかを一から検討し直すことが先決であるように思えてならない。

平成二十七年二月に奈良で開催された第二回珠光茶会において、東京国立博物館名誉館員故林屋晴三氏、茶道史研究家神津朝夫氏、武者小路千家千宗屋氏の三名によるシンポジウムが開かれた。その内容は「初期の侘び茶」についてであった。神津氏は冒頭で、昨今の茶道史研究の状況について解説されたが、その中で「これまでの茶道史では、室町將軍家で行われていた書院台子の茶が村田珠光らに伝わり、建盞など高価なものの代わりに当時下手物とされていた灰被天目などを用いた茶の湯を始め、その後武野紹鷗の頃により侘びたものとなり、千利休の手によって大成されたと考えられてきた。しかしいくら探しても、將軍の前に台子を持ち込んで、そこで同朋衆が点前をして茶を出したことがうかがえる資料が見つからないことから、今日では茶湯所（茶立所）で点てられたお茶を運んで出していたというのが通説となり、それを「書院の茶」と呼んでいる。客と同じ空間において点前をする侘茶のルーツは室町時代の書院の茶ではなく、市中の茶屋や一服一銭にあるのではないだろうか」と述べられた。つまり長い間、利休らが行っていた侘び数寄の茶のルーツは室町將軍家の書院台子の茶であると考えられてきたのだが、それを示唆する文字史料が発見できないことから、そのルーツは少なくとも書院台

1) 中村修也『利休切腹』洋泉社、2015年。

子の茶にはなく、あるいは市中の茶屋や一服一銭など、いわば民間の喫茶にあるのではないかという説を唱えられたのである。しかし、今日の茶道の点前の動作や道具組みにつながるものが市中の茶屋や一服一銭から生じたとは考えにくく、他の先行研究がすでに指摘しているように²⁾、日常生活を送る「ケ」の空間における、同朋衆による点茶と客の喫茶が同一の空間で行われる喫茶にルーツがあるように思えてならない。そこで現存する絵巻物や屏風などの絵画と、六代將軍足利義教の室町殿へ後花園天皇が永享九年（1437）に行幸した際に記された『室町殿行幸御飭記』³⁾などの史料をもとに、侘び数寄の茶の源流はどこにあるのかを検討していきたい。

第一章 書院台子の茶と民間における喫茶

まず長きにわたって、侘び数寄の茶の源流であると目されてきた書院台子の茶を描いた屏風絵にふれておきたい。《邸内遊楽図》（二条城内風俗図）（図1）の右隻には書院形式の茶室が描かれている。その中に点前をしていると思われる僧形の人物の他に五人の男女が描かれており、そのうちの一人は筆を手に持っていることから、歌会か、あるいは茶かぶきの様子と思われる。点前には棚が使われており、茶入や水指は形や釉の様子から和物であると思われる。同じく左隻には書院が張り出した部屋に、台子と茶道具一式が細かく描かれている。これと同じような場面が《邸内遊楽図屏風》（相応寺屏風）（図2）にも見えるが、こちらは点前の途中の風景であり、禿が茶を運んでいることから、僧形の人物は茶を点て終わったのでくつろいでいるのであろう。今日とほぼ同じ場所に道具が配置されているのが分かる。興味深いのは、今日では台子には天目茶碗以外を使うことはほぼないが、この絵では胴締め半筒形の茶碗が描かれている点である。そこで茶会記を見てみると、『松屋久政会記』天文六年九月十二日条十四屋宗伍会において「台子ニ平釜、天下一、ホウノサキ、蟹蓋置、上ニワケ盆ニ、高ライ茶碗トヤラウト置合テ」⁴⁾とあることから、古くから天目茶碗以外を用いる例も見られた。ただし台子に天目茶碗以外を用いる例は、やはり数が少ないことに留意しておく必要はあるだろう。いずれにしてもこの頃には茶の湯が様ざまな姿をもって広がりを見せていたことがうかがえる。また台子を用いて点前をしている様子は《調馬・厩図》（図3）にも描かれている。次の間の隅で台子に茶道具を並べ、茶堂（茶頭）と思われる頭巾を被った老人が、志野と思われる白い茶碗を用いて、主人や客に背を向けて一心に茶を点てている。そのすぐそばでは、若い小姓が縁側で調馬を見物している客に茶を運んでいるが、手にしている茶碗が黒色であることから楽茶碗か瀬戸黒茶

2) 赤井達郎他編『茶の湯絵画資料集成』平凡社 1992年 p.87。

3) 本稿では『東山御物——『雑華室印』に関する新史料を中心に——』（根津美術館・徳川美術館、1976年）に所収されている複製史料を底本に用いた。また足利義教の会所の間取りについては、『週刊朝日百科15 日本の歴史 中世Ⅱ——⑤金閣寺と銀閣 室町文化』所収の中村利則「足利義教室町殿会所復元平面図と殿舎配置図」を参考にしている。

4) 『茶道古典全集 第九巻』淡交新社 1957年 p.2。

碗かと思われる。点てられた茶を小姓が運ぶ様子は、後に触れる室町將軍家における茶の運び出しを彷彿とさせるものである。しかしなぜ「書院台子の茶」が長年もの間存在したと考えてきたのだろうか。『室町殿行幸御傍記』に記されている、各部屋に飾られた唐物を見ていくと、台子があることから、台子そのものはたしかに足利將軍家において用いられていたことは明らかである。しかし台子は会所泉殿の茶湯所である御四間に置かれているものの、そこに飾られていたのは「御建蓋 台 御壺」つまり天目茶碗と台、そして茶入しか飾られておらず、ほとんどの道具は違い棚に飾られているため、今日の台子点前の道具の配置をここに見出すことはできず、台子による点前の起源を足利將軍家における喫茶に求めるのは難しいように思われる。したがって、これは後の時代になって、飾り物を置く棚として室町將軍家において使用されていたのを、点前に用いていたと取り違えられたことによって生じたものと思われる。

次に神津氏が「侘び数寄の茶」のルーツとして挙げた、市中の茶屋と一服一銭がどのように描かれているかについて触れておきたい。一服一銭とは、すなわち荷い茶屋のことである。前田育徳会所蔵《七十一番職人尽歌合》(図4)のように、風炉に茶釜を置き、水桶と茶碗など道具一式を天秤棒で担ぎ、街中で茶を売り歩くか、門前などで座って売るのである。また小屋掛けをして道具を並べるものも後に出現した。

南北朝期以前のものと考えられている《地藏菩薩靈驗記絵》(図5)は、市中の茶屋を描いたものとしては最古のものと考えられている。大きな地藏堂のすぐ隣に茶屋があり、茶店の主人らしい僧形の人物と、二人の客が描かれている。主人は茶筥で茶碗を持ちながら茶を点てており、その目の前には高く盛り上げた竈土に乗る大きな羽のある釜が見える。また水桶の後ろに茶臼が置いてあることから、二人の客は抹茶を飲んでいるのが分かる。後ろの棚には青磁と白磁の茶碗が三つ、下の棚には現在の中次に近い黒漆塗りの円筒形の茶器そして茶筥が置いてある。左の人物が白磁の茶碗で茶を飲んでいるのに対し、右の人物は台に乗った天目茶碗と種類の違う茶碗で飲んでいる。中村氏はこの区別の理由について、茶の質、茶の値段によるものかもしれないと推測しているが、同時に施茶であることを考えると不公平なことは行われぬはずであるとも述べている⁵⁾。先に出した《七十一番職人尽歌合》においても、台に載った天目茶碗の他に、台に載った白磁の茶碗も描かれていることから、茶の質の違いによる使い分けがなされていた可能性があり、さらに主人は僧形ではあるが、茶売人として描かれている人物のほとんどが僧形であることから、寺院とはまったく関係のないことも考えられ、もしそうであるとするとこれは施茶ではないことになり、茶の質による値段の差があったとしても不思議ではない。

さて少し話の本筋からは逸れてしまうが、この《七十一番職人尽歌合》の煎じ物売りが用いている釜が切り合わせの当時ごくありふれた釜を描いているのに対し、一服一銭が用いている

5) 中村修也「茶の湯絵画資料見聞」(『淡交』別冊No57) 淡交社 2010年 p.98。

羽のある釜は甌口の部分と釜鑲の部分明らかに釜本体とは異なる色で描かれており、色から推して金か真鍮ではないかと思われる。『満濟准后日記』永享二年（1430）三月十七日の醍醐寺金剛輪院における花見の準備のために、前日に同朋衆の一人である立阿弥が金剛輪院の会所に飾った「室町殿会所置物」の中にある「甘子口胡銅」⁶⁾は、あるいはこうしたものを指す可能性がある。「甘子」はその読みが「鑪」と同じくすることから書かれたものと思われ、中世においては茶釜のことを「釜」、「鑪子」、「つり物」、「さがり」などと記していた。さらに通常釜には鑲付という穴が設けられ、そこに丸い釜鑲を通すことで持ち上げるか、あるいは手取釜のように左右にある常張鑲付に付いている一つの大きな弦を持って持ち上げるのだが、この釜は常張鑲付に付いている取手が左右にあるという、珍しい形式のものを描いているのである。

京都市東山区にある珍皇寺の伽藍を描いた《珍皇寺参詣曼荼羅図》（図6）は、桃山時代のものと考えられている。盃蘭盆会の様子や参詣する人びとの姿、門のすぐそばに立ち並ぶ茶店などを細かく描いている。門のすぐ左隣にある茶店には「ちや屋」と記されていることから、少なくともこの店は茶を売っている店であることは明らかである。やはり僧侶の形をした、主人と思しき人物が茶筌を手に茶を点ている。その手前には大きな羽のある茶釜と水桶があり、主人の隣には串刺しにした小さな餅を炭で焼いているのが見える。これはあぶり餅と思われ、京都の大徳寺近くにある今宮神社参道の二軒茶屋には今もあぶり餅が伝わっている。この絵から遅くとも桃山時代には茶とともに菓子を出す茶店が登場したことがうかがえ、ほぼ同時期かそれ以降のものと思われる《豊国祭礼図》にも、あぶり餅を焼いている茶店が描かれている。

以上にあげた絵画によれば、室町時代初期には庶民階層にまで喫茶の風習が浸透していた様子がうかがえる。史料上における市中の茶売りの初見は、京都府立京都学・歴彩館所蔵『国宝東寺百合文書』中にある、応永十年（1403）四月 日『南大門前一服一銭茶売人道覚等連署条々請文』である。茶売人の道覚らによる請文で、元の如く南の河縁に居住し、門下の石階辺りには移住しないこと、鎮守官仕えの部屋に茶具足を預け置かないこと、鎮守官や諸堂の香火をとり、灌頂院閼伽井の水を汲むことはしないことを誓約しており、本文末尾にこれらの事項に違反した場合、東寺周辺から追い払うことが記されている。茶売人たちによる誓約は、それ以前に彼らがこれらの事項を行っていたことが問題視されたことによるものであることは疑いようがない。この文書から、少なくとも東寺の門前には応永十年以前から茶を売ることを生業とした人がいたことは明らかである。また元の如く「南河縁」に居住することと、茶具足を預け置かないことを誓約していることから、この頃はまだ道具を運び込むのが一般的であったと思われる。また彼らの出自がいわゆる「河原者」であった可能性もある。東寺側が危惧した通り、翌年四月三日に茶売人が乞食に預けた火鉢から火が出たが、「寄衆打消火了」の一文から幸いにも燃え広がることはなく、すぐに消火できた様子が見て取れる。三日の甘一口方の評定によって、

6) 『満濟准后日記』続群書類従完成会 1928年 p.134。

茶売人らは東寺近辺から追い払われることが決定したが、醍醐寺三寶院若狭法眼以円のとりなしにより、東寺側は二十六日に新条件下での営業を許可することを決定した。新条件とは七月二十三日の請文書にある、南大門大路（九条大路）よりも南側で営業すること、火鉢や茶道具を南大門の下や築垣の蔭に置いたり、乞食などに預けないこと、軒先で雨宿りをしたり、寺内をみだりにうろつかないこと、「権門勢家」に助けを求めないことなど、前回よりもかなり厳しいものとなっている。さらに七年後（応永十八年）には、南大門が茶売りの営業によって汚くなっているため、毎日掃除をすることと、遊女を集めて接客させないことを挙げていることから、遊女に接客をさせるという新たな客寄せを行い、繁盛していた様子がかがえる。また同時に茶道具を預けないこと、水や香火を取らないことも誓約させていることから、これらはあまり守られていなかったようである⁷⁾。

第二章 会所における喫茶

中世になって登場した会所とは、すなわち何らかの催しが行われた特定の部屋、もしくは独立した建物のことである。公家や武家、僧侶、同朋衆など、身分の違う人びとが一堂に会し、連歌会や闘茶、花会などの遊興を催す空間であった。つまり会所は、今日の住宅でいうところの客間に当たり、貴賤を問わず人びとが集まる「ハレ」（晴れ）の場であった。「ハレ」は、今日「晴れ着」、「晴れの日」というように、年中行事や儀礼、祭りなどの非日常を指す言葉である。

観応二年（1351）に描かれた《慕帰絵詞》（図7）は本願寺覚如の一代記である。第五巻三段の歌会の場面は、初期の会所を知ることのできる貴重な資料である。中央に絵のある火桶を置いているが、移動可能な火桶の方が部屋を目的に合わせて自由に使用できるためであり、基本的に会所に囲炉裏が設けられることはなかった。畳が敷き詰められず、置き畳である理由も同様であろう。火桶の前で頬杖をついているのが主人公の覚如である。床の間はまだ設けられておらず、三幅の掛け軸が直接壁に掛けられ、その下には盆に載った香炉と一対の花瓶が直接板の間に置かれている。三幅対の中央の人物は、歌聖として名高い柿本人麻呂であろう。厨舎の方では料理が準備されているが、棚には丸盆の上に台に載った天目茶碗と茶筌、茶入などが見えることと、廊下には中の様子をうかがう山盛りの菓子盆を持った僧がいることから、茶を供した後に饗宴が開かれるのであろう。廊下の一隅には水桶と切り合いの風炉釜が据えられており、湯を沸かしているのであろうが、湯瓶（浄瓶）が釜の側に見当たらないため、この廊下の隅において茶を点て、客に運び出したものと思われる。

十五世紀半ば頃に成立したものと思われる《祭礼絵草紙》（図8）にも、会所に人びとが集う

7) 東寺南大門における茶売人追い払いの一件については、京都府立京都学・歴史館東寺百合 WEBにある百合百話 (<http://hyakugo.kyoto.jp/hyakuwa> 平成30年10月25日閲覧) No.22とNo.23「大変だった？ 茶店のはじまり」において、詳しく触れられている。

場面が描かれている。会所にいる人びとは壁に直接掛けられた三幅の水墨画や押板に並べられた花のない花瓶を眺めている。花が生けられていないのは、七夕立花の場合その翌日か翌々日に片付けるためであるといい⁸⁾、このことからこれは七夕立花の場面であり、人びとは花よりもむしろ花瓶のほうに関心があったことがうかがえる。この部屋の隣には割竹を輪違いに葺いた屋根の下に簀子が敷かれ、中央には水が描かれている部屋が描かれている。この空間に関しては、淋汗茶湯を行う場とする説と、泉殿ではないかとする説がある⁹⁾。《慕婦絵詞》と同じように、部屋の隅に水桶と風炉釜を据え、その傍に赤漆の丸盆に台に載った天目茶碗が確認でき、片膝を立てた人物が茶を飲んでいる。廊下の一隅に据えられた風炉と釜は切り合いであり、この時代には風炉と釜がセットで造られることが珍しいことではなかったことがうかがえる。《慕婦絵詞》と同様に湯瓶は描かれていない。

《酒飯論絵巻》(図9)は酒好きの公家と飯好きの僧侶が互いにその良さを論じ合い、どちらもほどほどに好む武家が仲裁に入るという物語だが、この場面では三人の人物が酒と膳に載った料理を食している。その奥隣の部屋では僧形の男が火吹竹でもって風炉の火をおこしており、食後の茶を準備しているところであろう。別の場面では茶臼を挽いているので、抹茶を飲むことは明らかである。料理を食している部屋は「ハレ」の場であり、隣の部屋が茶湯所として使われたのであろう。先ほどの《慕婦絵詞》、《祭礼絵草紙》では廊下や部屋の隅で湯を沸かし茶を点てていたが、やがて「茶湯所」として一つの部屋を設けるようになったと考えられる。茶湯所は、永享九年の《室町殿行幸御飭記》の中に記されている、南向会所の「北之御茶湯所」が早い例であろう。南向会所は、義教が築いた三つの会所の内でもっとも早い永享四年(1432)に建てられたものであることから、十五世紀の初期からこの頃までに成立したと考えてよいだろう。

《慕婦絵詞》、《祭礼絵草紙》、《酒飯論絵巻》の三点を取り上げたが、これらの作品などから「ハレの場」における喫茶がどのようなものかを考えると、いずれの作品にも湯瓶が描かれていないことから、風炉釜を据えた場所で茶を点て、それを客前に運んだのであろう。しかし唐時代末期より始まった点茶法による喫茶を描いた絵画には日本の茶釜に近いものはほとんどみられず、《文會図》(図10)のように炭火を入れた火桶の中に湯瓶を直接置いて、湯を沸かす様子が描かれていることから¹⁰⁾、日本においても点茶法がもたらされてしばらくは、湯瓶で直接湯を茶碗に入れて茶を点てる方法で行われていたと思われる。現在も建仁寺において行われている四つ頭茶会はその名残であろう。毎年四月二十日に開山である栄西の降誕会に引き続いて行われる四つ頭茶会における喫茶儀礼を四つ頭茶礼といい、これは平成二十四年(2012)に京都市

8) 林屋辰三郎著 村井康彦解説『図録茶道史—風流の成立/利休の道統』淡交社 1980年 図版275の解説文より。

9) 同上。

10) 新郷英弘『釜と工芸品』淡交社 2017年 p.70。

の無形文化財に指定されている。正客たる四名（四つ頭）を先頭に、それぞれの相伴客八名の合計三十六名が入室し、仮名のコの字形に置かれた畳に着座する。まず献香が行われ、その後四つ頭から順に菓子と「ぴりコン」という醤油で炊いた蒟蒻を盛った縁高と、抹茶の入った天目茶碗を配る。そして浄瓶の注口に茶筴を挿した状態で携えて入室し、客が持つ天目茶碗に左手で湯を注ぎ、右手に持った茶筴で点てるのである¹¹⁾。十五世紀前半頃の闘茶会について記した『喫茶往来』に「鑊子立てて湯を練」っているが、「左に湯瓶を提げ右手に茶筴を曳き」て茶を点ていることから、釜で沸かした湯を移し替えて使用したと考えられている¹²⁾。しかし永正十四年（1517）の土佐刑部大輔光信筆《清水寺縁起》（図11）にある大勢の僧侶が大般若経を写経している場面には、隣の建物において写経僧たちに振舞うための眠気覚ましの茶が準備されている様子も描かれているが、やはり湯瓶は描かれておらず、僧侶が茶筴で茶を点てており、すぐそばにいる二人の喝食（稚児）はそれぞれ方盆と丸盆を持ちながら茶が点て終わるのを待っているようである。点て終わった茶は喝食が盆に載せて写経僧の元へ運んでいき、各人に配り回ったと思われることから、寺院においても特別な儀礼以外の時は、茶は運び出されるように変化していったのではないかと考えられる。では日本において、中国式の湯瓶による点茶が普及しなかった理由については、中国では曲桌（椅子）に座ることが定着したのに対し、日本において曲桌はあまり普及せず、畳の上に直に胡坐をかい座る方式が定着した。この違いは生活習慣の違いから生じたものと思われ、椅子に座って所作を行う中国の生活様式と床や畳に座って所作を行う日本の生活様式では根本的に違いがあり、座って所作を行う日本人にとって湯瓶は合わなかったためではないかという説が、新郷英弘氏によって指摘されている¹³⁾。

第三章 「ケ」の空間における喫茶

「ケ」（藝）という言葉は、非日常を意味する「ハレ」の対義語として主に民俗学の方面で用いられている。つまり「ケ」の空間とは、日常を過ごすプライベートな空間のことである。永享四年以降に足利義教が築いた三つの会所の中で、最初に建てられた南向会所にある「雑華室」は、東山御物の由緒を持つもののうち伝李安忠筆《鶉図》、伝趙昌筆《竹虫図》、伝馬麟筆《梅花双雀図》などの作品に捺されている「雑華室印」という鑑蔵印から、義教の居間であったとされている。

十五世紀前期頃のものとする《福富草紙》（図12）は放屁の珍芸の能力により長者になった高向秀武が、板の間に敷きこまれた畳の上で夜着を打ち掛けて午睡を楽しむ場面である。部屋

11) 建仁寺四つ頭茶礼に関しては、福持昌之「京都の無形民俗文化財としての建仁寺四頭茶礼」（『大阪観光大学観光学研究報『観光&ツーリズム』第17号 2012年』）において詳しい紹介がされている。

12) 注10に同じ。

13) 新郷『釜と工芸品』p.71。

の中央には火桶が置かれ、山盛りの果物が載った大きな鉢、長柄の両口銚子など、庶民には無縁のものが床に直置きされているが、棚の上には青磁の鉢と茶碗が直に置かれ、その間には朱漆の丸盆に載る一對の天目茶碗に茶筌が描かれている。秀武のような成り上がり者がこうした唐物の茶道具を所持しているということは、いかに喫茶の風習が幅広い層に広まりを見せていたか、そして唐物は社会的地位を象徴するものであったことを画証しているといえよう。

十五世紀中頃のものとする《不動利益縁起》(図13)は、園城寺三門跡の一つであった常住院に祀られていた泣不動の靈験にまつわる説話である。三段目にある寺院の坊舎の室内が描かれているが、僧侶が集まる置き畳の部屋の中央には囲炉裏があるのが分かる。脇息に身を預ける僧智興がいる部屋は、枕のようなものが描かれていることから、納戸(眠床・眠蔵)であると思われる。禅院塔頭の方丈や独立会所などでは、北に面したケ向きに、日常的な居間として使われる書院と寝室である納戸が隣接している¹⁴⁾。となると、プライベートな空間である納戸に隣接し、また囲炉裏が切られていることから、この部屋もプライベートな空間であると考えられ、書院の前身ともいべき部屋であろう。この囲炉裏は暖房用に設けられたものであろうが、その周りに食籠や角盥に載る湯瓶、そして刻花文のある青磁の茶碗があり、画面左の棚には天目茶碗も飾られていることから、この部屋で茶が飲まれていた可能性は高い。なお、ほぼ同じような間取りの坊舎が二段目にも描かれており、その傍には湯瓶や大匙、細口丸壺など喫茶に関係するような道具が収まっている棚が置かれている。

十四世紀から十五世紀にかけて成立したと考えられている《掃墨物語》(図14)は、失恋から無常を感じた若い女性が、京都北山のとある僧坊で出家して隠棲する物語であるが、下巻冒頭のこの場面は女性が髪を下ろしているところである。その隣には六畳敷の部屋があり、壁一面には山水の張紙が貼られている。床の間には青磁の香炉が置かれ、軸装された水墨画が掛けられている。奥には細畳を敷き詰めた長床があり、太鼓が置かれている。《不動利益縁起》の囲炉裏のある書院らしき部屋は、納戸と隣接していることから「ケ」の空間であるとしたが、この部屋には中央に長方形の囲炉裏があるものの、剃髪の儀式を行っている仏堂と隣接しており、納戸や書院とは隣接していないことから、本当に「ケ」の空間と考えてよいかどうかはいささか疑問も残る。長方形の囲炉裏の縁は漆塗りであり、今日も使われている炉縁がすでに登場していたことがうかがえる。それを囲むように高麗縁の畳が敷かれているが、銅製の柄杓立と飯桶型の水桶が置かれている半畳だけは指筵となっていることから、ここで点前が行われたのではないかと考えられる¹⁵⁾。点前座だけが指筵になっているということは、将軍に近侍し、喫茶や道具に通じており、身分を低く見られていた同朋衆が点前をしたと考えられる。囲炉裏には上から鎖で短い注口のある鍮子が釣られているが、色からして金か真鍮のものと思われる。昭和三十四年(1954)に内モンゴル自治区赤峰市大営子遼駙馬贈衛国王墓より出土した湯壺(図15)

14) 赤井達郎他編『茶の湯絵画資料集成』p.18。

15) 同上 pp.16-17。

は、墓誌から応暦九年（959）に埋葬されたことが明らかであるが、遼は唐の銀器を重用し、さらに倣製も行ったという¹⁶⁾。注口が短いのは唐時代の特徴であり、『室町殿行幸御傍記』にも「御罐 金」「御罐 銀」とあることから、大陸で製作された金や銀などで製作された金属製の湯壺がある時期に日本へもたらされ、唐物として足利将軍家においても珍重されていた様子がうかがえる。奥の座敷では僧形の人物が臼を挽いていることから、これから出家祝いの茶会を行うのであろう。つまり、この部屋が「ケ」の空間であれば喫茶の場と点茶の場が同じ部屋で行われるようになり、「ハレ」の空間となると「ケ」の空間から興った喫茶が、「ハレ」の場において行われるようになったと考えられる。

第二章では《慕帰絵詞》、《祭礼絵草紙》、《酒飯論絵巻》の三点から、異なる場所で点てた茶を客前に運び込む「ハレ」の場における喫茶について、そしてこの章では《福富草紙》《不動利益縁起》《掃墨物語》の三点から、日常の空間における喫茶について絵画を通して考察してきたが、室町時代には二つの系列の異なる喫茶が併存していたと考えてもよいように思われる。そうした様子は、永享九年の『室町殿行幸御傍記』からもうかがい知ることができる。義教が築いた三つの会所の中で、南向会所の「北之御茶湯所」が茶湯所としては早い例であることはすでに述べたが、ここには茶道具の代表的なものとして「御罐如例 御水指如例象眼 下水染付」、続いて上重に「六建蓋 大海各一對」が、中重に「建蓋二」、下重に「湯瓶一胡銅 杓立 蓋置同青磁 はき 炭取」が置かれていたという。上重、中重、下重という表記から、これらはすべて《不動利益縁起》二段の囲炉裏の傍に描かれているような棚に置かれていることが分かる。一方南向会所の北御五間の御茶湯棚の上重に「建蓋 六 大茶碗青花形 菓子盆卅枚」が、下重に「食籠貝高 湯瓶一鍬石 下水 蓋置同鍬石」が飾られており、他に「御罐新調 風炉鍬石 水指青磁 杓立鍬石角 炭取藤南蛮物」があることから、この部屋においても茶を供することは可能であったと考えられる。北御五間は義教の書院である「雑華室」とのみ隣接していることをふまえると、北御五間も「ケ」の空間と見なすべきであろう。

会所泉殿においても茶湯所の御四間の違い棚には「御茶碗二青大小 臺 壺肩衝 方盆 食籠一對 建蓋一對」が置かれ、他にも「御罐銀 水指青磁 杓立 蓋置同鍬石 下水染付 かますえ胡銅 炭取」が飾られていた。囲炉裏のある赤漆之御床間にも「御つり物 水さし同南蛮物 下水胡銅 杓立胡銅 杓二 火箸鍬石 蓋置胡銅 炭かき 箒」が飾られており、御書院の御棚には「湯蓋饒州 御茶碗饒州よう入」と、やはり「ケ」の空間と思われる部屋にも茶道具が一式揃っており、また新会所（新造会所）では南御間が茶湯所に当たると思われるが、かりん製の茶湯棚の上重に「建蓋 台 壺なすび 盆」が、中重に「食籠 茶碗二青よう入 台 方盆 茶碗二白大小 台」が、下重に「建蓋六」とあり、その他「罐金 風炉胡銅 水指胡銅 鍬石 水覆染付 杓立 蓋置同青磁 杓二一竹一やし 火箸 かますへ胡銅 炭取」と一式揃

16) 小川裕充他編『世界美術大全集 東洋編 第5巻』小学館 1998年 p.397。

っている。ところが囲炉裏のある北向御四間の隣にある北御くつかたの御間にも、上重に「建蓋一對 台 方盆 茶碗二青花形大小 壺肩衝」が、中重に「食籠」が、下重に「建蓋五 銀台 鐘 風炉 杓立象眼 蓋置青磁 水指胡銅酒梅形 水覆染付 鐘すへ胡銅」と、やはり新会所においても「ケ」の部屋と思われる部屋に茶の道具が揃っている。

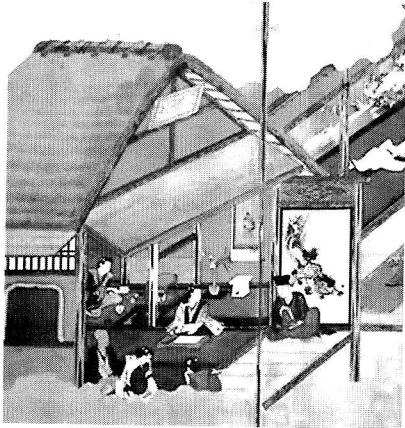
『室町殿行幸御飭記』から、永享年間にはすでに「ハレ」の空間において供される茶を点てる茶湯所が成立していたのと同時に、「ケ」の空間においては同じ部屋の中で茶が点てられ、客が喫することが可能であった様子もうかがえる。この頃には客人を迎え入れる際には、茶を供することが饗応の焦点であったことがうかがえるが、湯瓶が他の茶道具の傍に置かれているのは南向会所のみである理由はここでは明らかにしえないが、これはもしかすると將軍義教の普段の喫茶となにか関りがあるのかもしれない。

おわりに

ここまで室町時代の喫茶について検討してきたが、上流階級においては南北朝期以前より本茶非茶を飲み当てる「闘茶」が一つの遊興として流行していた一方で、『慕婦絵詞』のように歌会に付随して喫茶が行われることもあったことがうかがえる。また庶民階級においても、応永十年四月 日『南大門前一服一銭茶売人道覚等連署条々請文』などの史料と《地藏菩薩靈驗記絵》から、遅くとも南北朝期から応永年間にかけて寺社の門前に小屋掛けの店を構えるか、あるいは天秤棒で道具を持ち運んできて茶を売っていたことは明らかである。その後も市中における茶屋や一服一銭は様々な絵巻物や屏風に描かれていることから、中世を通して途絶えることなく続いていったのであろう。会所における喫茶は室町時代以前にはすでに成立していたものと思われるが、室町時代中頃になると《不動利益縁起》や《掃墨物語》のように、会所のように移動式の火桶を置くのではなく、囲炉裏を設けた「ケ」の空間における喫茶も登場した可能性を示唆する絵画資料も登場し、さらに『室町殿行幸御飭記』にもそうした様子がうかがえることから、こうした「ケ」の場における喫茶は「ハレ」の場の喫茶とともに併存していたのではないだろうか。《不動利益縁起》ではまだ畳は置畳であったが、《掃墨物語》では囲炉裏を囲むように畳が敷き詰められていることから、茶を喫することを目的とした空間として整備されていた様子がうかがえ、その後の侘び数寄の茶における茶室の原型と見てもよいのかもしれない。

また茶道具の中で特に茶釜に着目すると、『七十一番職人尽歌合』の一服一銭が用いている羽のある釜は、甌口の部分と釜鑊の部分は金か真鍮によって作られたものと思われ、『満濟准后日記』永享二年三月十七日の醍醐寺金剛輪院の花見に飾られた「甘子口胡銅」は、このようなものを指す可能性を指摘したが、現存する古い茶釜の中にこれに当てはまるようなものは見当たらない。またこの釜は常張鑊付に付いている取手が左右にあるという珍しい形式であるが、こ

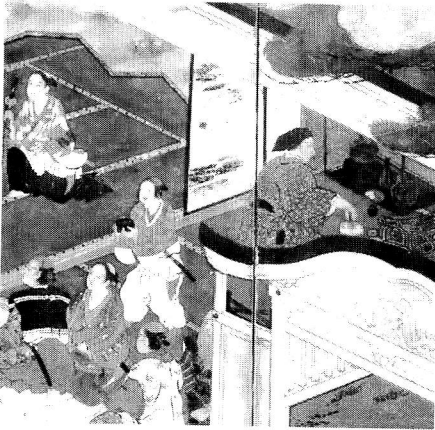
ちらについても当てはまるものがあるかどうかは不明である。さらに《掃墨物語》で上から鎖で釣られている金、あるいは真鍮製の鐘子は後の「手取釜」(図16)につながっていくと思われるが、手取釜の中には注口のあるものも存在することから、やはり手取釜の原型は大陸からもたらされた金属製の湯沸しであったと考えてよいように思われる。応暦九年(959)に埋葬された内モンゴル自治区赤峰市にある遼駙馬贈衛国王墓より出土した湯壺とその形がほぼ似通っており、また『室町殿行幸御筋記』に「御鐘 金」「御鐘 銀」とあることから、唐物の金属製湯壺が珍重されていた様子がうかがえることを指摘したが、こうした湯壺も日本と中国における生活様式の違いなどからあまり湯を沸かす物として当時の人びとに広まることはなく、その後は「手取釜」にその姿をとどめた程度であったといえよう。しかし日本の金属工芸史ではこうした一連の流れについてはあまり具体的な説明がなされていないように思われ、さらなる調査研究が必要であるように思えてならない。



【図1】《邸内遊楽図》（二条城内風俗図）
右隻部分



【図2】《邸内遊楽図屏風》（相応寺屏風）左隻部分



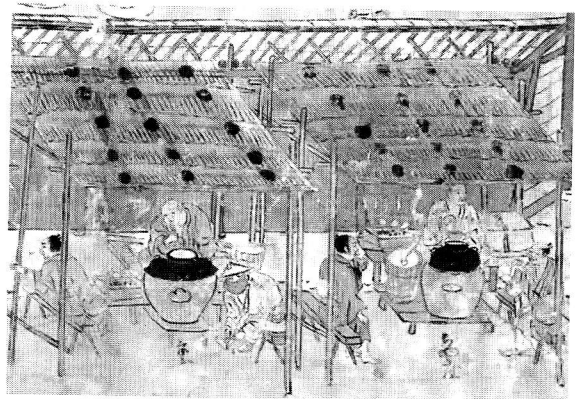
【図3】《調馬・厩図》右隻部分



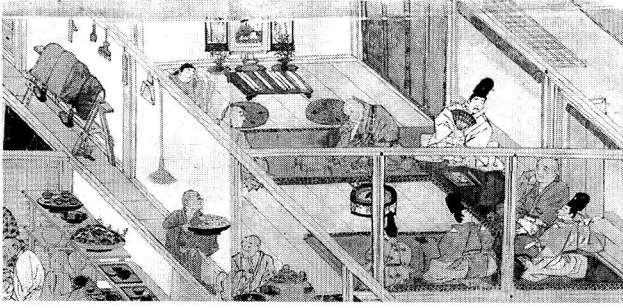
【図4】《七十一番職人尽歌合》より
一服一銭の部分



【図5】《地藏菩薩靈驗記絵》茶屋部分



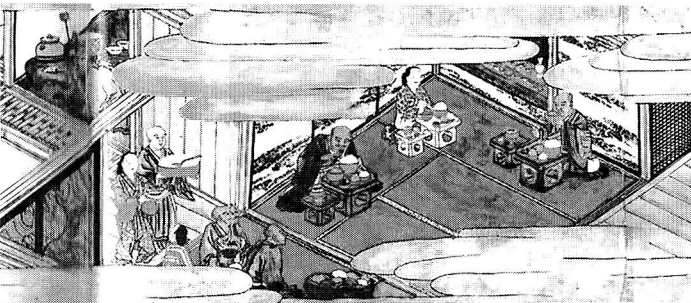
【図6】《珍皇寺参詣曼茶羅図》茶屋部分



【図7】《慕婦絵詞》巻5第3段の内 会所と厨房の一部分



【図8】《祭礼絵草紙》1巻の内



【図9】《酒飯論絵巻》1巻の内



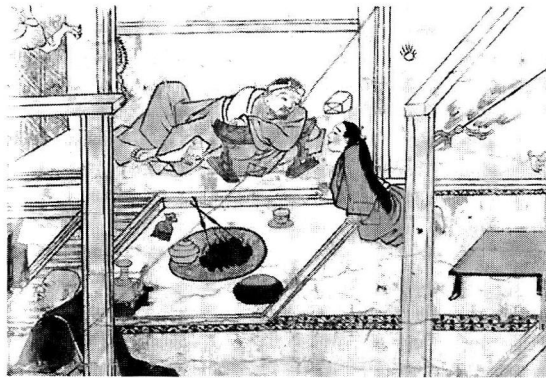
【図10】《文會図》



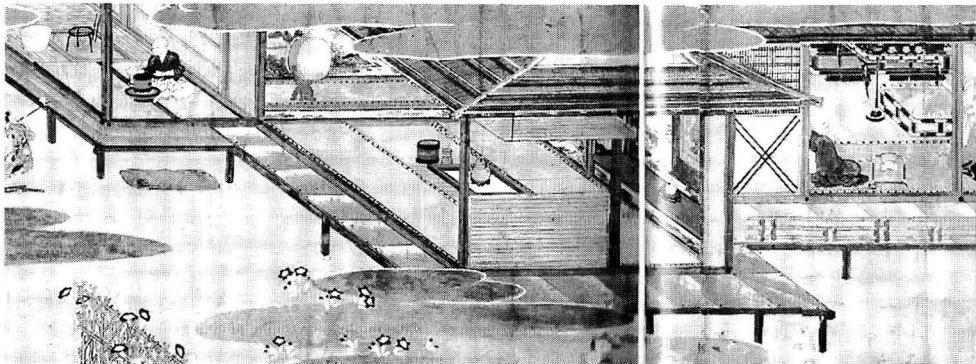
【図11】《清水寺縁起》巻上の内



【図12】《福富草紙》下巻の内



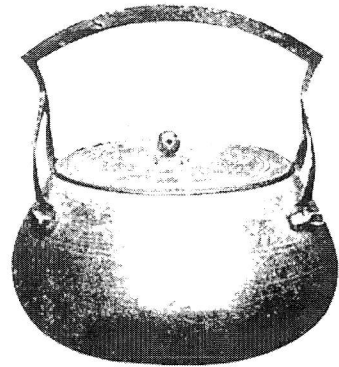
【図13】《不動利益縁起》三段目の内



【図14】《掃墨物語》下巻の内



【図15】 銀鱗文湯壺（1954年に内モンゴル自治区
赤峰市大営子遼駙馬贈衛国王墓より出土）



【図16】 広口手取釜 古天明作

【図版出典】

図1～9・11～14 赤井達郎他編 『茶の湯絵画資料集成』平凡社 1992年。

図10 国立故宫博物院「大観－北宋書画特展」（2006年12月25日～2007年3月25日開催）公式サイト
の作品解説より。2018年10月25日閲覧。（https://www.npm.gov.tw/exh95/grandview/painting/account_1_jp.html）

図15 小川裕充他編『世界美術大全集 東洋編 第5巻』小学館 1998年。

図16 木下桂風『釜の歴史と鑑賞』思文閣出版 1979年。